

学習意欲を高める授業

—高齢者疑似体験授業の改善を試みて—

衛生看護学科 森 本 美 佐

はじめに

近年、高等教育機関において教育課程に関する考え方が変わってきた。従来の教員が講義という形の中で教授するといった指示的学習ではなく、教えることよりも学ぶことを強調した学習方法に変化してきたのである。その中で教員の役割は、学生が知識を発見できるような環境を作ることであると言われている。知識を教え込むのではなく、むしろ教え込まない学習、つまり学生が自ら知識を取り入れ自分の学習に反映することが出来るような授業が望まれている。

老年看護学概論の授業においても、学生が関心を持って学べるようにさまざまな工夫をしてきた。従来の高齢者疑似体験でも気付きや学びはあったが、多くを気付いて欲しいと思うばかりにゆとりを持った体験が出来ず、結果としては高齢者に対する学習への関心を高めることは出来なかった。そこで、学生が興味を持って高齢者疑似体験に参加でき、その後の学習の動機付けとなるように検討し変更した。変更した授業構成内容と授業評価についてここに報告する。

I. 研究目的

変更した高齢者疑似体験授業が、従来の授業に比べ学習意欲につながっているのかをアンケート調査を通して知り、授業評価を行う。

II. 授業方法

1. 高齢者疑似体験の指導目標

- 1) 老いの体験により、老年期にある人々の身体の動きや姿勢に興味を持ち、老化現象について関心が高まる。
- 2) 老いの体験により、老年期にある対象の特徴や問題に気付き、接し方やサポートのあり方など看護の必要性を理解する。

2. 行動目標

- 1) 老化現象によって起こる身体面・精神面・社会面への影響を体験できる。
- 2) 高齢者の安全・安楽・自立の観点から援助の必要性を感じ取ることができる。
- 3) 上記のことについてまとめ発表できる。

3. 従来の授業

高齢者疑似体験セットを用い、視野狭窄や視力低下、聴力低下、関節拘縮、前傾姿勢などを再現し、ベッドへの臥床や階段昇降、テレビを見るなどの体験をする。全員が体験できるが、物品と時間に限りがあるため体験内容は教員が決めた項目2項目にとどまり、グループ間で他の学生の学びを共有する形を取っていた。

4. 変更した授業

事前に高齢者疑似体験の目標と、1時間の枠組みの中で体験したいライフイベント項目を5～6人のグループで考え計画書を作成する。計画書を元に授業時間までに高齢者疑似体験セットを除く必要な物品をそろえる。時間内でグループ全員が計画書に基づいて体験する。学生が老化現象による日常生活の不自由さを気付いていけるよう教員は発問をしながら体験を見守る。各グループの体験をまとめ、翌週の講義時間に発表し、体験の学びを共有する。

Ⅲ. 研究方法

1. 調査方法

調査対象は、授業を変更する前年10月の老年看護学の授業に出席した学生84名（従来群）と、変更後の200X年10月の老年看護学の授業に出席した学生83名（変更群）である。両者とも体験学習を行ってから約4ヶ月が経過していた。調査協力に同意した学生に、授業終了後質問紙を配布し、無記名で記入後回収した。質問項目は、筆者が平成14年に実施した調査¹⁾用紙を元に、学生の反応として得られるであろう高齢者イメージ（理解）の15項目を選定した。各項目について、大変思う（5）からまったく思わない（1）までの5段階評価とし、各群の平均値を出し検定を行った。データ分析には統計パッケージSPSS11.0Jを使用した。また、最も感じたことを自由記載してもらい、高齢者イメージの広がりの内容を比較した。意欲を見る指標として、今後の学習に対する学生の反応5項目を、イメージと同様の5段階評価とし分析した。また高齢者模擬体験後の体験回数も調査した。

2. 倫理的配慮

学生には口頭と文書で、アンケートの目的・方法、プライバシーの保護、協力の拒否や結果が成績評価に影響しないことを説明し、回収を持って同意を得た。回収は回収箱を設置し、回答者が特定されないよう配慮した。

IV. 結果

回収率は、従来群は84名中82名（97.6%）、変更群は83名中82名（98.8%）であった。

1. 高齢者の理解

学生が高齢者疑似体験をして感じたことは、表1に示す通りである。変更群が高い項目は、「年をとるのが怖い」「何をするにも不安」「話をしたくない」の3項目で、「不安」と「話をしたくない」の項目では5%水準で有意差が見られた。従来群が高かった項目は、「誰かそばにいて欲しい」と「動きたくない」で、「誰かそばにいて欲しい」では1%水準で有意差が見られた。自由記入欄では「体がだるく何をするのも嫌になった」という意見が両者とも多く見られていた。

表1. 体験を通して感じたこと（平均値の比較）

項目	従来群 (n=82)	変更群 (n=82)	有意確率
年をとるのが怖い	4.0487	4.2317	0.1969
何をするにも不安になる	3.5121	3.9302	※ 0.0123
一人でいるのが怖く誰かそばにいて欲しい	3.8658	3.4024	※※ 0.0030
動きたくない	3.6219	3.4268	0.2470
話をしたくない	3.0853	3.4512	※ 0.0214

身体面や日常生活動作の困難さの理解は表2に示す。10項目中9項目において従来群の方が困難さを感じ取ることが出来ていた。特に「歩きにくい」と「落ちているものが拾いにくい」では1%水準で有意差が見られた。「テレビの音が聞こえにくい」という項目では、有意差は認められなかったが、変更群は平均4.0121と高値を示した。自由記入欄では、従来群では「階段は上りより下りが怖い」という意

表2. 身体面・日常生活動作の困難さの理解（平均値の比較）

項目	従来群 (n=82)	変更群 (n=82)	有意確率
小さい字が見にくい	4.3171	4.1585	0.2564
視野が狭い	4.1707	4.1585	0.9323
見難い色がある	4.2317	4.0731	0.2441
話し声が聞こえにくい	4.1829	4.0121	0.1928
テレビの音が聞こえにくい	3.7926	4.0121	0.1385
歩きにくい	4.2580	3.8536	※※ 0.0034
ベッドから起き上がりにくい	4.0487	4	0.7074
普通に仰向きに寝られない	3.9756	3.7317	0.1065
階段昇降がしにくい	4.0853	3.9390	0.3235
落ちているものが拾いにくい	4.0975	3.5975	※※ 0.0004

見以外なかったが、変更群では経験した内容によって「テレビや携帯電話の受診音のボリュームは、周りの音の環境によって変わる」や「私たちが目立つと思って使っている色が見難い」「電子レンジのベースの色によって見難い色が変わる」「電話の話し声がどうしても大きくなる」などバラエティに富んだ意見が見られた。この内容は、疑似体験後のグループ発表内容にもあがっており、4ヶ月経ってもその気付きは継続していた。

2. 老年看護への学習意欲

次に学習意欲について調査した(表3)。すべての項目において変更群の方が高値を示していた。特に、「老化現象について調べたい」は1%水準で、「老人医療・保健・介護について調べたい」は5%水準で有意差があった。

表3. 学習意欲の平均値の比較

項目	従来群 (n=82)	変更群 (n=82)	有意確率
授業を熱心に聴くようになった	3.6219	3.7317	0.4218
高齢者の行動の意味を考えるようになった	4.1707	4.2317	0.6454
老化現象についてもっと調べたい	3.5487	4.0731	** 0.0001
老人医療・保健・介護について調べたい	3.4512	3.7804	* 0.0248
話し方や環境などケアを考えるようになった	4.2317	4.2343	0.9216

授業時間外での体験学習の有無を尋ねると、表4のごとく従来群では、1回もしなかったものが57名で、2回以上体験したものは一人もいなかった。変更群では体験しなかったものは42名

表4. 時間外体験学習の有無

	体験なし	1回	2回以上
従来群 (n=82)	57	25	0
変更群 (n=82)	42	36	4

で2回以上の体験者は4名いた。χ²検定の結果5%水準で有意差が見られた。

V. 考察

1. 高齢者理解

身体面・日常生活動作の困難さにおいて従来群のほうが全体的に高かったものの、どちらの群も平均点が4前後と高く殆どのものが理解できたと考える。従来群の方が高値だったのは、模擬体験をあらかじめ教員が示したことで学んで欲しい課題が明確であったためと考えられる。しかし自由記入欄を見ると、従来群では1つの意見しか出ていなかったのに比べ、変更群は感じたことの内容もバラエティに富んでいる。今鷹ら²⁾の調査でも、教員が一律にした高齢者疑似体験を行った学校に比べ、学生自身が自由に計画した疑似体験を行った学校の方が高齢者へのイメージの広がり大きいといわれている。学生

が自由な発想で日常生活に基づいた体験項目を考えたことで、画一したイメージではなく、生活していく上で困るといような色々な気付きが出てきたのではないかと思われる。そしてそのことが4ヶ月経っても継続して感じる事が出来ている理由ではないだろうか。

体験して感じたことは項目により差があったものの、変更群においても、すべての項目が3.4以上を示していた。「何をするにも不安」「話をしたくない」では従来群と比べ有意差も見られ、高齢者が生活上の不自由さから不安を抱き、孤独感を感じ、そして精神的に閉じこもっていく危険性を感じ取ることが出来たと考えられる。しかし、一般に体験学習により精神的な理解が高まるといわれているが、今回の調査では両群とも身体面の理解に比べ平均点が低かった。これは、体験直後ではなく4ヶ月が経過したために、精神的な苦痛よりも体得した身体面での苦痛が強が残ったのではないかと思われる。

2. 老年看護への学習意欲

高齢者への興味関心・探究心のすべての項目において変更群の方が上回っていた。学生自身が自ら体験したい項目を企画し行うことで積極的に疑似体験に参加でき、また、発表の場を設けたことで他の学生の意見を聞き、自分たちとは違った発見が出来、そのことが主体的な学習行動を生み出したのではないかと考えられる。授業時間外での体験学習を、夏季休暇をはさんでの4ヶ月間で半数の者が行ったことからそのことが伺える。

全体的に見て、学習への意欲や学びは個人差が見られたが深まる傾向が見られた。ウルリッチ³⁾は学生の感覚を全体的に刺激し、学生をグループに巻き込むことによって、学生の学習の可能性を高めると述べている。今回、学生に自由に体験したい日常生活動作項目をあげさせた事で、学生はまず自分たちが何気なくしている日常生活動作を見直すことが出来、「年をとるとこんなことが出来なくなるんだ」という五感を通しての気付きが、さらに老化現象について調べたいというような意欲につながったと思われる。従来の短時間での体験とは違い、1時間という枠の中であらかじめ計画を立てさせているため、時間的にもゆとりがあり、計画には上げていなくても1つの気付きから違う体験へと広げていく学生もいた。受身的な「させられ体験」ではなく、「したい体験」であったからこそ、その場限りの学びではなく主体的な学習へとつながったのではないかと考えている。

VI. まとめ

健康な若い学生に、短い時間で少しでも高齢者への理解と関心を深めさせるために、体験方法を変え、グループで学んだことを発表する場を設けた。この体験学習が従来の方法に比べ学習意欲につながっているのかを知る目的でアンケート調査を行った結果、以下のことが分かった。

- ① 身体面の理解では従来群の方が高かったが、高齢者の日常生活上の困難さのイメージの広がり、変更群の方が感じられていた。
- ② 「何をするにも不安」「話をしたくない」という項目で変更群の方が高く有意差も見られ、精神的に閉じこもっていく危険性を感じ取ることができていた。

- ③ 高齢者への探究心を表すすべての項目で変更群の方が高く、個人差はあるものの学習意欲が深まる傾向にあった。

VII. 今後の課題

今回の疑似体験では、グループにより時間がある限り色々な体験をしようとするグループと、時間が余っていても、自分たちが考えたことしかしないというグループもあった。今後は、後者のグループへのファシリテーター的役割を行い、学習活動を促進していけるような教具の提供や発問などの環境を作り出していくことが必要であると考えられる。

また、この体験学習が主体的な積み重ねの学習につながっているかどうかは、経過を追って調査していく必要があり、本研究の限界といえる。より妥当性のある授業評価の方法を模索し、今後も学習意欲を持続させていくための授業改善の努力を行っていきたい。

文献

- 1) 森本美佐：老年体験学習の学習効果と今後の課題，奈良文化女子短期大学紀要，第33号，39-46，2002.
- 2) 今鷹瑞：主体的学習姿勢を育てる授業—高齢者疑似体験を通して—，第35回日本看護学会抄録集看護教育，94，2004.
- 3) 高島尚美訳、ウルリッチ著：看護教育におけるグループ学習のすすめ方，医学書院，2002.
- 4) 吉田喜久代，他：特集「主体的に学ぶ」授業，看護教育，42（4），263-278，2001.
- 5) 池田輝政，他：成長するティップス先生—授業デザインのための秘訣集—，玉川大学出版部，2004.
- 6) 藤岡寛治，他：わかる授業をつくる看護教育技法3—シミュレーション・体験学習—，医学書院，2000.